

(2) 茂原市東条家收藏内田家文書

【史料 80】 殿様御用金高 享保二十（一七三五）年

殿様江御用金指上候金高辻

ミつのへ寅卯年迄拾貳年

一新金九百拾貳両貳分 御用金指上候御証文壹通

右者無抛御急用御座候而達而御頼ニ付無抛奉存大切之砌御用立申上御奉公仕候

ミつのへとら四月日々

一新金三百八拾八両三分ト銀八匁三分 御用金指上候御証文壹通

右者寅四月兵庫屋弥兵衛御扶持米指招罷有候ニ付福嶋松原重郎右衛門殿永野三郎右衛門殿御越被遊候節兵庫屋弥兵衛御扶持米一切指上不申至極御難儀被遊其節拙者同苗弥次馬江出被被致候ニ付御屋鋪江被為御召御家老中御始御役人御衆中御揃御意被遊候ハ外之儀ハ少々延引之儀可罷成事ニ候得共御扶持米之儀ハ一日茂難明在之候何卒新米出来迄ニ御用立申候得者殿様御為ニ罷成家中一統ニ致案堵候間是非々々御用立呉候様ニ達而被遊御意無抛奉在四月中方八月上旬迄二両二六斗之相場高直成ル米儀ヲ以指上申候処ニ御済之儀ハ其秋福嶋廻船初船ニ而年壹割半之理足加江急度御返済可被遊御約諾ニ而右之御衆中様方御印形被成御証文御渡被成候處ニ只今迄壹錢も理足も不被下被指置至極難儀仕候此段了簡可被下候

戌正月廿一日

一金千両也

御用指上候元金也

右者金子御手支被遊 殿様於御居間ニ御意被遊候ハ段々御不勝手ニ付御手支被遊候間此節之儀ニ在之候付相渡ケ様ニ御頼被遊無抛奉存儀を以右千両之金子急度都合仕指上申候尤其節百石知行被下置候得共今以壹錢も理足も不被下被指置候ケ様成儀乍憚了簡被成下候様ニ奉頼上候其砌飯田新兵衛方江 殿様御直ニ金子五百両御用立申候様ニ被仰付候處ニ御請仕其以後漸々金子貳百両指上殘金三百両ハ只今迄壹錢も指上不申罷有候得共其通被指置於弥次馬殘念ニ奉存候其節老所ニ兩人被仰付候ニ付千両之内半金茂御返済可被下候處ニ一円御沙汰なしニ被指置候段殘念千万奉存候責而ハ飯田新兵衛義不屈成ル仕方其方儀ハ御意之通千両之金子急度被御用立候段氣毒千万成ル仕方と御不断被思召可被下筈之事と奉存候

卯之閏三月

一元金三百両

御用金指上申候

右者当春御手支被遊御難儀之由被仰越候ニ付所々無抛者共相頼都合仕指上申候当春杯ハ殊外御領分も困窮仕少々之金子茂難調御座候得共色々工面仕致都合指上申候近年之困窮ニ而ハ少々之金子も難調候得共色々工面仕御用相達申上候乍憚ケ様成ル義御心添被成下候様奉存候御尋茂御座候ハ、委細ハ口上可申上候、以上

享保二拾年乙卯七月

内田清三郎

鯉淵八百右衛門殿

西山弥兵衛殿

【史料 81】 殿様御用金控帳

元文二（一七三七）年

（竪冊・表紙）

元文二辰年改

殿様御用金控帳

寛保二戌年方安永二巳年迄

覚

享保七寅年方元文二辰年迄御用金指引残

一文字金貳万貳千貳百七拾貳両貳分

銀四匁貳分七厘

（朱）「御改ニ付目錄上ル正清時代」

享保二拾乙卯十二月

一金三百両

御婚礼御用

享保廿一辛（ママ）辰年三月

一米五百俵

御飯米納

一金三百貳拾六両三分卜銀四匁貳分五厘 同

右者丙辰六月方同十一月晦日迄御賄金御証文有

一金四千百五拾五両卜銀四匁五分

同

右者丙辰極月方丁巳八月迄御賄金御証文有

一金六百両

四本

右者戊午六月方極月迄指上御証文有

同

五口合金五千三百八拾壹両三分銀八匁七步五厘

米五百俵

元文五年申十二月

一金三百五拾両

右者浅井孫右衛門殿御頼ニ付福嶋為替金卜差上候

寛保二年戌八月

一元金三百両

殿様御黒印

右者福嶋御発賀金松原重郎右衛門殿御頼ニ付差上候

寛保二年戌九月

一元金百拾両

右者松原十郎右衛門殿御頼ニ付指上候

寛保三年亥五月御米五百俵御切手有

一元金百両

右者御家督御用天野宗右衛門殿御頼ニ付指上候

寛保四年子二月

一元金百五拾両

東金御切手米先納

右者天野宗右衛門殿御頼ニ付指上候

寛保三年癸亥六月

一金貳百拾四両壹分

銀貳匁壹步四厘

右者御扶持方米八拾石相殘金子ニ而納石川善右衛門殿裏印
寛保四年甲子二月

江戸金連中加り

一元金貳百七拾六兩三分 御賄金指上候

銀拾三匁七分

右者二月より十一月迄月々割合御扶持方御雜用共連中八人割

合請御印形帳面式通有り

延享元年子三月

一元金三百兩

右者御領分御賄金指上候

延享元年子五月

一元金六拾兩

右同断

延享二年乙丑五月

一元金三百六拾七兩壹分銀廿三匁六分四厘

右者丑五月より八月迄御雜用諸色金指上候

延享二年乙丑四月

御証文式通メ

一元金九百四拾貳兩壹分 御賄金

銀拾四匁六分六厘

鏹壹貫貳百七拾九文

元金合八千五百五拾貳兩壹分

銀六拾目八分九厘

鏹壹貫貳百七拾九文

元米ノ五百俵 御扶持□米納

一金百兩 延享年中目録上ル 弥次馬引請ニ付返済

一金貳拾五兩 荒木伊兵衛方弥次馬

利し五兩 請合ニ付元利立替

ノ三拾兩 帳面改之外先キ出ス

延享元年甲子六月

一米三百七拾五俵 御切手壹枚

右者御領分名主庄左衛門庄作七郎左衛門与左衛門四人引請

奥印有り

一米貳千六百俵 御切手三拾七枚

右者綿貫平十郎方金子弥次馬引請ニ付神田久右衛門町屋鋪

質地ニ付平十郎方へ屋敷相渡切申候而指引済

一同五百俵 寛保元酉 十一月 御切手壹枚

一同三百俵 申十一月廿日 御切手壹枚

一同百俵 享保廿年乙卯一月小綱町上総屋平兵衛納 五合入

一米五百俵 延享元年甲子六月 御切手有

右者大金指上候ニ付御差引可被成下迄右米五百俵宛年々被

下置候様被仰付候得共御切手斗被下置候

(朱書) 御改ニ付目録上ル正清時代

宝曆五年亥正月上ル

一金四拾兩 京達上ル

同五月上ル

一金貳拾兩 同人上ル

宝暦十年未

一金拾六兩ト銀五匁四分四厘 正澄上ル（朱書）

右者庄作、新兵衛正月々六月迄兩人ニ而月々米三百俵宛御飯米指上候節末ノ七月分米百五拾俵間違出来故弥次馬御役中

之内御屋敷様御間ヲ受ケ候儀、氣之毒ニ奉存候故弥次馬方ニ而相働米百五拾俵御間合セ候、右御返濟福嶋御廻米御渡被成

元引御指引仕候処、右金拾六兩ト銀五匁四分〇厘不足ニ而清三郎立替金主江相濟申候、此訳御役所西脇三助殿日記ニ御印

置被下候筈ニ御座候、御証文之儀者庄作、新兵衛方相渡申候明和貳年酉正月々六月迄 正澄上ル（朱書）

一金四拾八兩貳分ト銀拾匁五分 西脇三助殿月々請取斗右者中嶋金左衛門殿御頼

明和三年戌正月々六月迄 正澄上ル（朱書）
一金五拾六兩三分ト銀拾三匁五分、右同断

右同断
安永二年巳ノ六月 同上上ル（朱書）

一金拾兩 請取斗
右者村雨弥市殿御頼

一米七百八拾五俵壹斗三升五合
一金貳拾六兩三分錢七百拾三文

右者弥次馬御役中御領分御物成御勘定而已
帳面改外 伊勢町

一金百兩 小綱屋五郎兵衛分

松屋茂兵衛借主

弥次馬請印ニ付立替

はせ川丁

荒木伊兵衛分立替

同断
一金三拾兩
金百三拾兩也

（No. 11）

【史料 82】御用金請取 寛保二（一七四二）年

請取申金子之事

一金三百兩者 但文小判也

右者此度福嶋御発駕御要用金慥請取申所実正也、返済之儀者来ル霜月中限壹ヶ月拾五兩壹分利足加元利急度返済可申候、内外如何様之儀有之候共相違申間敷候、万一其節相滞候ハ東金当戌御物成之内ニ而石代米御引取金主方江可被相渡候、其節此方江不及窺候、其元名田之質地出入候上者聊相違申間敷候、為後日証文仍如件
寛保二壬戌年八月 浅井清左衛門印

大川新左衛門印

村雨八郎左衛門印

竹内 藤馬印

村雨丈右衛門印

新家弥一右衛門印

内田清三郎殿

長谷川平左衛門^印
松原十郎右衛門^印

(No. 5)

【史料 83】廻米証文之事

寛保四（一七四四）年

廻米証文之事

福嶋米七千俵也

但蔵廻納四斗入

右者板倉式部勝手要用金子并家中為扶持米代当子秋物成米收納初発
方十一月中限無遲滞可致廻米候、尤於当地請取被申度候ハ、是又勝
手次第相渡可申候、津出運送等之儀者前々之通可致運送候、右俵高
究之通少茂相違無之候段不作不納之儀有之候共右之員数少も無相違
相渡可申処違乱有之間敷候、依之廻米証文連判為後日仍如件

寛保四甲子年二月

朝倉只右衛門

竹下 又六

内田 茂吉

内藤十右衛門

高橋万右衛門

名倉治部右衛門

村雨丈右衛門

石川善左衛門

浅井孫右衛門

松原十郎右衛門

米屋 久右衛門殿

松屋 茂平殿

駿河屋 又八殿

名物 嘉兵衛殿

川沙屋 忠四郎殿

奈良屋 太郎兵衛殿

小綱屋 五郎兵衛殿

東屋 清右衛門殿

右福嶋廻米七千俵相渡申候処相違無之候付福嶋役人共致連印候、猶
又拙者共奥判相添相渡申候、右廻米江戸表二而都合七千俵相渡申候、
運送失脚之儀者福嶋表入用懸有之候荷打破船損金之儀者是又此方可
為損金候、勿論福嶋表米相場二而請取被申候ハ、其元方可為損金候、
右廻米福嶋二而受取被申候共江戸表口相場二而受取被申候ハ、運送
失脚ハ不及申荷打破船等之儀者是又此方損金二而有之候、尤福嶋米
相場口勝手二而所払被致候共総州銚子迄之運送諸失脚入用金子相積
相添相渡可申極二而御座候、廻米運送失脚惣軀銚子迄二而有之候右
之通り相談之上相究都合廻米七千俵員数少も相違無之候、其節如何
様之儀有之候共毛頭違乱有之間敷候、為後日奥判証文仍如件

寛保四甲子年二月

西脇新右衛門

高原 与六

浅井清左衛門

東屋清右衛門殿

大川新左衛門
村雨八郎左衛門
竹内 藤馬
池田權兵衛
新家惣右衛門
水野喜左衛門
長谷川久左衛門
天野宗右衛門

(No. 6)

【史料 84】下知書 享保二十(一七三五)年

(包紙) 享保二拾年乙卯六月三日

此度新知五拾石内田清三郎江被下置候
殿様御平写二御書附被下置候

(1)

其方事御役儀情出し無滞相勤候、未達者二ハ候得共段々及老年一人二而相勤候儀別而太儀思召候、且又数年御奉公之訳旁二付此度悴清三郎御取立向後其方勤方万事見習候様被 仰付候、依之新知五十石被下置候旨 御意被成候、罷歸清三郎江茂右之趣可申聞候、以上

六月三日

(2)

覚

一五人扶持

内田清三郎

以上

西十一月廿八日

(No. 2)

【史料 85】下知書 寛政九(一七九七)年

(包紙)

「 寛政九丁巳正月廿二日

正辰(花押) 」

其方儀弥無事相務候旨一段之事候、然者兼而申付候通勝手向用事取続之事此上共二可致出情候、存寄有之儀ハ不及遠慮年寄共江訴其方任存念為二成り候様随分出情可申候、以上

十二月十八日 甲斐

(No. 12)

【史料 86】内田弥次馬宗門一札 天明四（一七八四）年

一札

一日蓮宗

内田 弥次馬

同 妻 女

養子 辰次郎

右者拙者旦那粉無御座候、若脇方悪宗門と申者御座候ハ、何方迄茂
罷出急度申訳可仕候、為後日仍而如件

京都妙満寺末

天明四甲辰年十月

上総国山辺郡

本漸寺

板倉内膳正様御内

野村角左衛門殿

（No.
9）